

APIR Commentary No.15

アフリカにもっと民間投資を

5年に一度のアフリカ開発会議(TICAD)が6月1日(土)から3日(月)に横浜で開催される。アフリカ全土より約40カ国の首脳級及び総勢2000名弱のハイレベルな代表団を日本が迎えることになる。バン・ギムン国連事務総長、キム世界銀行総裁ら国際機関の長も大挙して来日する。日本のメディアもここにきて多面的にアフリカへのまなざしがシャープにしてくれている。

今回は、2008年に続き5回目のTICAD開催であるが、一つだけ明らかに言えることはアフリカが今や「成長大陸」になっているということである。2001年から2011年までの世界のGDP成長率は平均3.7%であるが、サブ・サハラ全体では平均5.7%で、名目GDPは10年間で3.2倍に拡大し、アフリカ全土でインドやロシア並みの規模となっている。豊富な石油資源やレアメタル等の鉱物資源を中心とした高成長であるわけだが、この経済構造をより多角的なものにしていくため、民間企業の果たす役割は大きい。

筆者は1980年に西アフリカ象牙海岸共和国の首都アビジャンにあるアフリカ開発銀行の日本代表として初めて海外勤務を経験した。赴任に際して、パリを経由してから最初に給油で降りたナイジェリア北部のカノでは、既にその当時、西澤株式会社が紡績工場を稼働させていた。また、象牙海岸の首都から遠く離れたディンボクロという3万人規模の小さな町にはユニチカが5000人もの現地雇用を生み出す紡績工場を展開していた。いずれも関西系！さらに、当時のアビジャンには主要商社6社やコマツが支店を持ち、西アフリカ各地にビジネス展開していた。これが、石油ショックから10年も経たない時代に、果敢に世界に貿易・投資展開した日本である。

現在のアフリカはマクロ経済も安定し、人材も格段に良くなってきている。今年3月にナイジェリアを訪れた際、世界銀行の総裁候補にもなった20年来の友人であるオコンジョ=イウエラ財務大臣からは「我々はODAではなく、もっと日本の民間投資が欲しい。中国や韓国との間に相当水をあけられている」と強い調子で迫られた。国際協力機構(JICA)としては、インフラ整備・人作りのみならず日本の民間企業の進出には中小企業も含めより一層注力していく所存である。アジアも大切だが日本はもっとグローバル国家のはずだ。何よりも、企業の皆さまのアニマル・スピリッツが今まで以上に必要だ。そうした精神は既に30年前から我々の中にあっただからだ。



筆者(左から2人目)、オコンジョ=イウエラ大臣(左から3人目)とナイジェリア財務省の幹部たち

<国際協力機構(JICA)理事 小寺 清, contact@apir.or.jp, 06-6485-7690 >

・本レポートは、執筆者の見解に基づき作成されたものであり、当研究所の見解を示すものではありません。
・本レポートは信頼できるとされる各種データに基づいて作成されていますが、その正確性、完全性を保証するものではありません。また、記載された内容は、今後予告なしに変更されることがあります。